

增刊教育雜誌

第七百號

明治三十五年八月五日

目次

官令

- 文部省令第十七號
- 文部省令第十八號
- 文部省告示第五號
- 縣令甲第五十九號

論說

- 祝日大祭日ニ就キテ 福島 亦八
- 小學校ノ農業科ニツキテ 放縱 農夫

教育

- 高等科女兒ヲ以テ一學級ヲ編制シタル者ノ教授法一斑 須永和 三郎
- 算術實驗談(其二) 東洋居士

學術

- 豐太岡明の封冊の話(前號の續)

質疑

- 東洋氏ノ質疑ニ對シ愚見ヲ述フ 千峯

文藝

- 送櫻本熊雄歸郷序 里見助太郎

詩 二首

- 算盤ニ就テ 島水生
- 願はくは教へよ 東洋居士

雜纂

- 町田尋常師範學校長
- 單級教授法研究會
- 小學校教則研究會
- 教員檢定
- 明治廿五年七月各分科大學卒業者府縣別一覽表
- 珠算改良會
- 埼玉私立教育會葛飾支會の通信
- 葛飾學校一年紀念會
- 埼玉私立教育會南埼玉支會
- 入間高麗郡諮問會
- 辭令
- 本縣尋常師範學校春期修學旅行記事

廣告 二件

埼玉教育雜誌第一百七號

官令

●文部省令第十七號

教科用圖書檢定手数料ハ明治二十四年十二月勅令第二百四十五號ニ依リ本年九月一日ヨリ登記印紙ヲ以テ納ムヘシ

明治二十五年七月十四日 文部大臣 伯爵大木喬任

●文部省令第十八號

明治二十四年十一月文部省令第十九號小學校教員檢定等ニ關スル規則施行以前ニ授與シタル小學校教員免許狀又ハ之ト同一ノ效ヲ有スル小學校師範學校卒業證書ニシテ同規則施行以後一箇年間ニ有効期限ノ滿ツルモノヲ所持スル者ニ就キテハ北海道廳長官府廳知事ニ於テ該免許狀又ハ卒業證書ノ有効期限ヲ三箇年以内延期スルコトヲ得

明治二十五年七月十四日 文部大臣 伯爵大木喬任

●文部省告示第五號

本年七月文部省令第十七號ニ依リ登記印紙ヲ以テ教科用圖書檢定手数料ヲ納ムルニハ地方廳ニ於テ願書ノ査閲ヲ受ケタル後其願書ニ印紙ヲ貼付シ消印スヘシ

明治二十五年七月十四日 文部大臣 伯爵大木喬任

●縣令甲第五十九號

祝日大祭日ニ就キテ

本年七月文部省令第十八號ニ基キ明治十九年八月文部省令第十二號小學校教員免許規則ニ依リ本縣ニ於テ授與シタル第一百八號乃至第六百六號ノ地方免許狀ヲ所持スル者ニ就キテハ該免許狀有効満期ノ日ヨリ三箇年間其有効期限ヲ延期ス

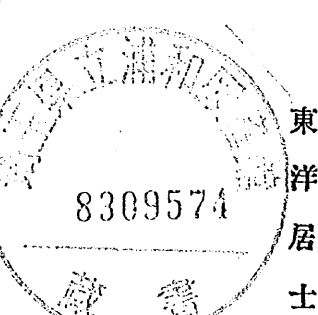
明治廿五年七月十九日 埼玉縣知事 久保田貫一

論說

●祝日大祭日ニ就キテ 福島 亦八

祝日大祭日ニハ小學校ハ特ニ注意シテ當日ノ儀式ヲ執行シ荷モ教師タリ生徒タル者ハ假令平素事故ノ爲メニ欠席スルコト有リトモ當日ハ必ス參列スヘキハ勿論ノ事ナリ然ルニ地方ニ依リテハ全ク之ト反對ノ情況有リテ通常ノ日ニハ一里以上ノ行路ヲモ遠シトセス又烈風猛雨ヲモ苦トモサルノ生徒ニシテ其當日ニハ左シタル事故無キニモ關セス却テ往々欠席スルモノアリテ時ニハ殆ト平日ノ三分ノ二ニ滿タサルコト有ルノ學校アリト之レ果シテ何ニ由ルカ

蓋シ小學校ニ於テ祝日大祭日ノ儀式ヲ舉グルハ漸ク近頃ノ創始ナレハ生徒父兄カ未タ其理ヲ解セス一般ニ之ヲ重視セサルノ頗有アルノミナラス却テ歌謠ヒ日ナト、稱シ



テ殊更ニ遠方ヨリ參列スルノ必要ナシト思考ス之此ノ弊
風ノ由テ生スル重ナル原因ナランカ然レ又他方ヨリ觀察
スルハ其學校職員ノ精神如何ニモ大ニ關係ヲ有セス
ハアラス從來祝日大祭日等ハ休日ニ屬シ職員モ爲メニ
日ノ安息ヲ得タルノ習慣ヨリ多クノ教師中ニハ何トナ
ク此儀式ヲ以テ煩ハシト爲シ興ノ責メ防キ、役逃レノ爲
メ簡單ニ執行シ畢ラントノ傾無キヲ保スヘカラス否此傾
ハ全然タル想像ニ非ス早ク式ヲ濟シテ生徒ヲ返サレハ
喧騒ニ堪エストハ余輩カ幾回カ耳ニシタル所ナリ且補助
教師トノ中ニモ當日ハ教授ノ務ナキヲ幸ヒ且欠席シタ
リトテ別ニ答メナク又出勤簿ニハ更ニ關係ナケレハトテ
私用ニ托シテ參列ヲ欠クモノ有ル余輩ノ時々見受クル所
ナリ此等ハ果ノ右ノ弊風ト如何ナル關係ヲ有スヘキカ
夫學校職員カ當日參列スヘキハ明ニ法令ノ指示スル所
ニシテ苟モ事ニ堪エサルノ疾病ニ罹リ又ハ實地已ムヘカ
ラサルノ事故有ルニ非サルヨリハ必ス出席シカメテ神聖
ニ儀式ヲ舉クヘキハ當ニ法又上ノ義務ナルノミナラス
又德義上ノ責任ナリ況ヤ當日ニ於テハ郡長若クハ學務主
任者等ノ臨場セラル、ニ於テオヤ之ヲ如何テカ其校職員
タルモノ猥リニ欠席シテ可ナランヤ嗚呼教育者ノ名ヲ冠
スルモノニ尙此風有リトハ歎スヘキノ至リナラスヤ

之ヲ要スルニ右ノ弊風ハ其父兄ヨリ來ルヨリモ寧ロ教員
ノ精神儀式ノ方法等ヨリ來ルモノ多シト斷言スルモ誣言
ニ非ルヘシ之ヲ再言セハ教師中式日ニ對スル感情ノ冷淡
ナルモノアルト加フルニ教員中動モスレハ欠席者有リ又
其儀式タル單ニ校庭ニ參集シテ二三ノ唱歌ヲ爲シ(勿論
其日ニ由リテ 勸語ノ奉讀有レトモ)教師ノ簡單ナル説
話ヲ聽聞スルノミ他ニ一モ感スヘキ動スヘキモノ有ルナ
シ之ヲ以テ其式禮ニ費スノ時間ハ僅々一時内外ノミ而シ
テ爾後直ニ退散セシムルモノナレハナリ宜ナル哉遠方ヨ
リ來集シタル生徒カ一種異様ノ感ヲ起シテ漸ク參列ヲ怠
ルヤ又父兄カ其不必要ヲ唱フルヤ
果シテ然ラハ之ヲ匡正スルノ方法ハ如何曰ク他ナシ教師
タルモノ特ニ首座教師タルモノ確ク省令ノ旨趣ヲ体シ又
職務上ノ德義ヲ守リ決シテ責メ防キ的ノ思想ヲ持セス彼
ノ徒ニ外形ヲ摸スルノ虛禮ニ陷ラサルヲ力メ充分ナル
満足ト充分ナル效果トヲ與ヘンヲ冀圖シ又式ノ終リタ
ル後モ從來ノ如ク直ニ之ヲ以テ散會ヲ告ケス各種ノ遊戲
運動會等ヲ催シ生徒ヲシテ當日ノ樂ムヘキ喜フヘキ日ナ
ルヲ感セシムヘシ斯クスルハ生徒ハ彼ノ俗間ニ益祭
又ハ御九日祭ヲ待ツカ如ク久シキ前ヨリ屈指シテ當日ノ
至ランヲ待ツカ如クナルヘシ又彼ノ參列ヲ煩ハシトス

ル職員輩ノ如キ充分之ヲ督責シテ猶常日ノ如ク出勤簿ニ
記載シテ明カニ其義務ヲ怠ルモノナルヲ指示スヘシ然
ルハ自然此ノ風ヲ改良スルニ至ルヘキカ敢テ大方君子
ノ教示ヲ乞フ

●小學校ノ農業科ニツキテ

放縱 農夫

新小學令實施ノ運ニ至リ本縣中ニモ農業科ヲ以テ小學教
科目中ニ加フルコトニ相談セラレシ郡多シ然ル以上ハ一
言本誌ノ餘白ヲ借り縣下教育家ノ高教ヲ乞フハント欲ス
高等小學校教科目ハ其種類甚タ多シ然ルニ尙又新教科目
ヲ加ヘントセハ生徒ノ困難ハ勿論ナリト雖モ我國ノ農業
ハ元來經驗ニノミ委シ術ハ進ミタルモ學ニ至リテ大ニ欠
乏セリ夫レ農業ハ學ト術ト並行シテ進ミ兩者合調シテ始
メテ完全スルモノナレハ兒童ノ小學ニアルトキヨリ早ク
腦中ニ其學理ヲ印象セシメハ後日農業ノ改良ヲ補助スル
其効決ノ少ナカラサルヘシ

高等小學校ノ生徒ハ未タ漸ク尋常小學ヲ卒業シタルノミ
ナレハ農業科タル一應用科學ヲ教フルハ頗ル困難ナリ何
トナレハ應用トナルヘキ科目ノ一通サヘモ未タ修メサル
モノナレハナリ應用トナルヘキ學科ハ重ニ理科ナレハ理
科ヲ修メ然レ後農業科ヲ修メシムル方順序ナリト雖モ然

カスルニハ高等四年級ヲ卒業シタル後ニ於テセサルヘカ
ラス之レ到底能ハサルコトナリ故ニ寧ロ一年級ヨリ之ヲ
課シ理科ヲ教フルト共ニ農ノ學及ヒ術ヲ教フルコト尤モ
可ナリト信スルナリ

一週間ノ教授時間ハ一年級二年級ハ一週一時間トシ二年
級三年級ハ一週二時間トシ之ニ依リテ左ニ教授目錄ヲ列
載スヘシ但一年間ヲ四十週トス

第一週 緒言(農業ハ如何ナルモノナルカヲ授ク)

第二週 前ノ續キ

第三週 土壤ノ定義

第四週 表土(土壤ヲ上下二層ニ分チ上層ヲ表土トシ下
層ヲ心土トナスコトヲ授ク)

第五週 心土(表土ト心土トノ區別ヲ授ク)

第六週 土壤ノ効用(土壤ハ植物ヲ安置シ植物營養分ヲ
與ヘ植物ニ溫度ヲ與フルヲ授ク)

第七週 前ノ續キ

第八週 土壤生成ノ原(土壤ハ岩石ノ崩壞ヨリ成ルコト
ヲ授ク)

第九週 前續

第十週 寒暖ノ變換(岩石ノ土壤ニ變スル作用ノ一)

第十一週 水氷ノ運動(其二)
第十二週 水及ヒ空氣ノ化學的作用(其三)
第十三週 前續
第十四週 動植物ノ作用(其三)
第十五週 土壤ノ構成(土壤ハ有機無機兩物ヨリナルコトヲ授ク)
第十六週 有機物(有機元素ノ種類及ヒ其性質ヲ授ク)
第十七週 前ノ續キ
第十八週 無機物(無機元素ノ種類及ヒ其性質ヲ授ク)
第十九週 前ノ續キ
第二十週 同
第二十一週 同
第二十二週 同
第二十三週 同
第二十四週 同
第二十五週 土壤理學の性質
第二十六週 重量、吸力、毛細管引力、通水力、蒸發力、收縮力、膨脹力、固着力、溫度
第二十七週 第二十四週迄前ノ續キ
第二十八週 豐饒土壤(豐饒土壤ハ理學の性質化學の性質及ヒ氣候ニ關スルコトヲ教フ)

第四十週 第三十六週ヨリ第四十週迄前ノ續キ
第二年級
第一週 瘠薄土壤(瘠薄土壤ノ原因ニ理學の源因及ヒ化學の源因アルコトヲ教フ)
第二週 第二週ヨリ第三週迄前ノ續キ
第三週 土壤ノ種類(土壤ノ種類ニ沖積土、具土、砂土、礫土、粘土、石灰土アルコトヲ教フ)
第四週 第五週ヨリ第十週迄前ノ續キ
第十週 肥料(肥料ハ如何ナルモノカヲ授ク)
第十一週 肥料ヲ要スル理由
第十二週 肥料ヲ要スル理由
第十三週 前ノ續キ
第十四週 前ノ續キ
第十五週 肥料ノ種類(肥料ニ苗肥、油糞、泥炭、人糞、人尿、骨肥、魚肥、石灰、木灰、石膏、堆肥ノ種類アルコト及ヒ各肥料ノ種類作用、施法等ヲ授ク)
第十六週ヨリ第四十週ニ至ル迄前ノ續キ
第三年級
第一週 農具
第二週 農具ノ種類(農具ニ犁、鋤、耙、万能、鎌、稻扱、連枷、磑、颯扇、萬石簾、杵、杵等ノ種類アルコト及ヒ各農具ノ構造法、使用法、効用等ヲ授ク)

第十週 第三週ヨリ第十週迄前ノ續キ
第十一週 土質改良(土質改良法ニ耕鋤法、土壤ヲ固ムル法、混合法、燒土法、排水法、灌水法等アルコト及ヒ方法及ヒ効用ヲ授ク)
第二十週 第十二週ヨリ第二十週迄前ノ續キ
第二十一週 栽培(栽培總論即チ種子ノ選擇、播種方法、苗床移植、輪栽法等ヲ授ク)
第二十五週 第二十二週ヨリ第二十五週迄前ノ續キ
第二十六週 稻(稻ノ種類、播種、苗代、播種、插秧、肥料、灌溉、除草、收穫、稻田管理等ヲ授ク)
第三十週 第二十七週ヨリ第三十週迄前ノ續キ
第三十一週 小麥(小麥ノ適地、播種、耕種、收穫等ヲ授ク)
第三十二週 前ノ續キ
第三十三週 大麥(大麥ノ適地、播種等ヲ授ク)
第三十四週 大豆(大豆ノ適地、肥料、播種、中耕、收穫等ヲ授ク)
第三十五週 前ノ續キ
第三十六週 蘿蔔(種類適地培養肥料効用ヲ授ク)
第三十七週 甘藷(適地、苗床、移植、蔓反、收穫、効用等ヲ授ク)
第三十八週 前ノ續キ

第三十九週 茄子(適地、苗床、移植等ヲ授ク)
第四十週 甜瓜(適地、培養等ヲ授ク)
第四年級
第一週 桑(種類、適地、苗木植方、桑樹仕立、苗木採方、肥料等ヲ授ク)
第四週 第二週ヨリ第四週迄前ノ續キ
第五週 茶(適地、播種、培養、肥料等ヲ授ク)
第六週 前ノ續キ
第七週 養蠶(蠶室、蠶具、蠶種、蠶種貯藏、催青法、掃下法飼育法、熟蠶、收穫、蠶害等ヲ授ク)
第十四週 第八週ヨリ第十四週迄前ノ續キ
第十五週 養雞(鶏舎、飼料、管理、蕃殖等ヲ授ク)
第二十週 第十六週ヨリ第二十週迄前ノ續キ
第二十一週 家畜(養種法、畜舎、牧場、飼料、調理、管理等ヲ授ク)
第二十五週 第二十二週ヨリ第二十五週迄前ノ續キ
第二十六週 果樹(蕃殖法、移植法、剪枝、耕培、効用等ヲ授ク)
第三十一週 第三十七週ヨリ第三十一週迄前ノ續キ
第三十二週 樹木(適地、蕃殖、伐木、炭等ヲ授ク)
第三十七週 第三十三週ヨリ第三十七週迄前ノ續キ

第三十八週 有害物(動植物等)ノ害アルモノヲ授ク
第四十週 第三十九週第四十週前ノ續キ

教 育

●高等科女兒ヲ以テ一學級ヲ編制シタル者ノ教授法一斑

左ニ掲クルモノハ本縣尋常師範學校附屬小學校ニ於テ實驗シタルモノヲ基礎トシ更ニ余ノ考察ヲ加ヘタルモノナリ今ヤ單級及二學年以上ノ兒童ヲ合シテ一學級トナシタル者ニ付キテ其教授法ヲ研究スルノ必要起レリ若シ夫レ此方法ニシテ幾分ノ裨補スルアラシカ余ノ幸之ニ過キサルナリ

須永和三郎識

第一 編制

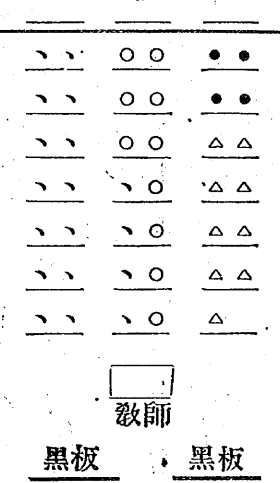
高等科第一學年ヨリ同第四學年マテノ女兒ヲ以テ之ヲ編制シ更ニ之ヲ二部ニ内別ス即チ第一學年及第二學年ヲ以テ一部トシ第三學年及第四學年ヲ以テ二部トス而シテ其人員左ノ如シ

高等第一學年 十八人
同 第二學年 十人
同 第三學年 九人

同 第四學年 四人
合計 四十一人

五 間

教 場 ノ 排 列



第二 教授ノ擔任及女兒ノ仕事

一、教授ノ擔任ハ訓導ヲ以テ主任トシ教生ヲ以テ之ヲ補助セシム而シテ教科ノ分擔左ノ如シ

訓導 修身、讀書、作文、習字、圖畫、唱歌、裁縫
教生 算術、地理、歷史、理科

二、一部二部ノ女兒ニ各一人ノ當番ヲ置キ左ノ事ヲナサシム而シテ其任期チ一週間トシ當番欠席ノトキハ次席ノ女兒ニ代テ之ヲナサシム

一、清書帖及作文帖等ヲ聚メテ之ヲ教師ニ出シ又ハ教師ヨリ受取リテ之ヲ各女兒ニ分配スルコト

一、習字作文等ノ際水ヲ配ハルコト

第三 教授上ノ部分ケ

教授上ノ都合ニヨリ各部ヲ組合スルヲ左ノ如シ

科目	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
修身	一	部	二	部
讀書	一	部	二	部
作文	一	部	二	部
習字	一	部	二	部
算術	一	部	二	部
地理	一	部	二	部
歷史	一	部	二	部
理科	一	部	二	部
圖畫	一	部	二	部
唱歌	一	部	二	部
裁縫	一	部	二	部
遊戲	一	部	二	部
家事	一	部	二	部

火	遊一	算	讀一	理一	裁一
水	遊一	算	讀一	理一	裁一
木	遊一	算	讀一	理一	裁一
金	遊一	算	讀一	理一	裁一
土	遊一	算	讀一	理一	裁一

備考 第一時ハ半時間之ヲ課ス。一、二ノ記號ハ一部二部ノ零ニシテ之ヲ記サ、ルハ各部ニ之ヲ課スルモノナリ

第五 教授ノ方法

一、修身 各部全時ニ之ヲ課シ其教案ヲ二種トシ一ハ一部ノ女兒ニ適スルモノニハ二部ノ女兒ニ適スルモノヲ撰ヒ其教授ハ

隔回ニ之ヲ行フ而シテ一部ノ女兒ニ適スル談話ヲナストキハ二部ノ女兒ハ等シク其談話ヲ聽キ二部ノ女兒ニ適スル談話ヲナストキハ一部ノ女兒等シク其談話ヲ聽クモノトシ其筆記ハ各部ニ適スルモノノミヲ書取ラシム(談話ノ種類ニ依リテ各部ニ筆記セシム)

二、讀書、習字、圖畫

此三教科目ハ各部チ分テ之ヲ教授シ每部同讀本、同習字帖、同圖畫帖ヲ用ヒシム而シテ其教授ノ方法ハ教師ハ豫メ小黑板ニ讀本中ノ難字ヲ摘書シテ之ニ假名ヲ附シ讀

書ヲ課ス可キ女兒ヲシテ之ニヨリテ下讀ヲサシメ此間教師ハ他ノ部ニ向テ習字或ハ圖畫ヲサシムルノ準備ヲナシ(説明、書寫上ノ注意等)然ル後摘書ノ意味、讀本ノ讀方、講シ方等ヲ授ク但此際常ニ習字、圖畫等ノ教授ニ注意スルモノトス

三、作文

作文ハ通例各部共一文題ニヨリテ之ヲ作ラシムト雖モ時ニ各部別文題ヲ授クルコトアリ前ノ場合ニ於テハ各部全時ニ其思想ヲ練習シ後ノ場合ニ於テハ何レカ一部ノ女兒ニハ豫メ讀書若クハ其他ノ教科目ニ於テ教授シタル事項或ハ既ニ談話シタル事柄及女兒自ラ見聞シタル事柄ヲ文題トシ專ラ他ノ一部ニ向テ作文上ノ觀念ヲ授ク

各部同文題ニヨリテ授クル例

小間物注文の文

十五六歳の女子に似合候やうなる品柄にて束髪の釵ならびに帯どめ至急入用に候まゝ只今御持参下されたく頼みあげまゐらせ候

右ノ旨趣ニヨリテ各部女兒ニ向テ其觀念ヲ開發ス斯クシテ既ニ思想ノ秩序ヲ整ヘタル後第一部ノ女兒ニ命ジテ之ヲ文ニ綴ラシメ第二部ノ女兒ニ向テハ更ニ左ノ如ク其旨趣ヲ擴メテ其觀念ヲ開發シ之ヲ文ニ綴ラシム

十五六歳の女子に似合候やうなる品柄にて束髪の釵ならびに金かな具の帯どめ至急入用に候まゝ只今御持参下されたく直段の少く高くとも宜しく候ゆへ、たしかなる品を數多く御見せ下さるべく御頼みまで文して申あげまゐらせ候

右ノ文章中、似合、束髪、釵等ノ如キ字ハ豫メ小黑板ニ記シ置キ作文ノ際女兒ニ之ヲ示スモノトス

四、算術

各部全時ニ之ヲ課シ其問題ハ各部同問題ヲ以テ之ヲ授クルコトアリ又別問題ヲ用フルコトアリ而シテ各部ノ課程ヲ甲乙ノ二年ニ分配スルコト左ノ如シ

第一部(一學年)

簡易ナル比例問題及小數珠算練習

第二部(二學年)

度量衡貨幣及時刻ノ計算、通常ノ分數、珠算練習

(教則參照)

算術	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
度量衡貨幣及時刻ノ計算、通常ノ分數、珠算練習	簡易ナル比例問題及小數珠算練習	比例問題、珠算練習	珠算練習	全上

算術ノ問題ハ凡テ小黑板ヲ用ヒテ教師豫メ之ヲ記シ置キ以テ授業ヲナスモノトス

各部一問題ニヨリテ教授スル例

- 雞卵若干箇ヲ二十五人ニ分與スルトキハ六人ノ所得四十八箇ナリト云フ
總數幾何ナルヤ(一部)
今二十人ヲ増ストキハ九人ノ所得如何(二部)
- 一等米一石ノ價ハ二等米一石ニ斗ノ價ニ等シ而シテ二等米五十石ノ價ハ廿六圓廿五錢ナリト云フ然ルトキハ一等米一石ノ價如何(一部)
一等米五十石ハ斗ノ價如何(二部)

五、地理、歴史、理科、裁縫

地理歴史理科ハ凡テ裁縫ト組合セ各部別々ニ之ヲ授ク而シテ教授上地理及歴史ノ課程ヲ甲乙二年ニ分ツコト左ノ如シ

第一部(一學年)

甲 郷土地理、本縣地理

第二部(三學年)

乙 日本地理ノ大要、地球

第一部(二學年)

甲 外國地理ノ大要

第一部乙ノ課程ヲ授クルトキニ於テハ最初一學年ノ女兒丈ニ地理上ノ基本的觀念ヲ與フルモノトシ此際二學年ノ女兒ニハ前學年授ケタル所ヲ補習ス(以上地理)

第一部(三學年)

乙 日本歴史

第二部(四學年)

同 後半

(教則參照)

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
日本地理	郷土地理、本縣地理、日本地理ノ大要、地球大要	日本地理ノ外國地理ノ大要	日本地理ノ補習	
日本歴史	郷土ニ關スル史談	國初ヨリ現時ニ至ルマテノ事歴ノ大要	國初ヨリ現時ニ至ルマテノ事歴ノ大要	
外國地理	國初ヨリ現時ニ至ルマテノ事歴ノ大要	前學年ノ續テ事歴ノ大要	前學年ノ續テ事歴ノ大要	
歴史	以上ノ如ク部分ケテ授ケシテ之ヲ教授シ毎部何レカ一學年ノ女兒ニハ適當ノ書物ヲ持タシメ(題目全シクシテ其程度丈ケテ異ニセル頁書アレハ各學年ニ之ヲ持タシメテ可ナリ)他ノ學年ノ女兒ニハ筆記セシム而シテ談話ハ全時ニ之ヲ授クルモノトス			
理科	一部二部ヲ分テ授ケ共事柄ハ各部毎ニ同事項ヲ授ク			
裁縫	モ一部二部ヲ分テ授ケ之ヲ教授スト雖其事項ハ各學年ニ依リテ異ナリトス			
六、唱歌	各部全時ニ之ヲ授ケ一部ニ授クルモノハ二部ノ複習トナリ二部ニ授クルモノハ一部亦其教授ヲ受ク			
七、家事及遊戯				

家事・理科ノ一部トシテ二部ノ女兒ニノミ之ヲ授ケ遊戯
ハ一部ノ女兒ニノミ之ヲ課ス

注意 凡テ女兒ニ筆記セシム可キ事柄及問題等ハ教師
ハ豫メ小黑板ニ記載シ置キ教場ニ於テ黑板ニ記
スルハ主トシテ臨時ニ起リタル事柄ノミトス

算術實驗談 其二 東洋居士

暗算法

五六年あとのとでしたか、東京の立波な學校の先生が、暗算の筆算の法に由る可からず必珠算の法に従ふべしとか云ふとを其生徒に談義されたを聞きまして、暗算に筆算珠算の別ありと申と、聞いたばかりで、仕方今に存じませんが、余には余の暗算と云ふものありて、久しき以前より余は之に由りて行て來ました、依て第二の實驗談よりは之を申上げやうと存じ升、

第一例 一本の價三錢五厘の筆を十二本買はんと欲す何程を要するや

説明 三錢五厘が十にて三十五錢、三錢五厘が二で七錢、七錢と三十五錢とで四十二錢、是が十二本の代金です

第二例 其筆八本よて何程
説明 三錢五厘が十で三十五錢、なれども八本は十本

より三本少い故、二本の價七錢を三十五錢の中から取除けた殘金二十八錢が、八本の代金です

第三例 其筆三十八本でいくらく

説明 三錢五厘が十で三十五錢、三十五錢が四で一圓四十錢、是は四十本の價です、依て此中から二本の代金七錢を引去れば、三十八本の價一圓三十三錢を得るのです、

第四例 其筆六十二本でいくらく

説明 三錢五厘の十倍が三十五錢、三十五錢の六倍が二圓十錢、是が六十本の代金故、是に二本の代金七錢を加ふれば六十二本の價二圓十七錢を得る次第です、餘は之に準じて知り玉へとして、余の序を以て、此に今世普通の法と比較して何れが利あるを視やうと存じ升、

第五例 一冊の價十二錢五厘づゝの本二十八冊買ふ時いくらく
今世普通の法 十二錢五厘が八にていくらくなるのを見るに一圓、十二錢五厘が二十で、十二錢五厘へ二十をかけて筆算法を行ふ二圓五十錢、合せて三圓五十錢となる、

余の説明 十二錢五厘が十で一圓二十五錢、二十で二圓五十錢、三十で三圓七十五錢とある、是れ三十冊の價です、依て二冊の價二十五錢を此中より引去れば、二十

八冊の代金三圓五十錢とあり升、

右の如き方法は既に現世に用ゐて居らつしやツる方々澤山ありまして獨私ばかりで有り升まい、果して然らば、余の暗算法と申しましたの甚不當で失禮で御座い升が、悲しい哉私の眼光の照り渡した界内は於て今も此法を見受けません、加之古より行り來たれるを以て、ソレで余の暗算法と申した譯で有り升、違ひましたら御免候へ、

學 術

●豊太閣明の封冊の話 (前號の續)

さて是より此書狀の來歴をお話し申さん此書が如何して民間に零ちじやの詳かならねど舊くより筑前福岡の藩士龜井道載の家へ傳はれり此道載と云ふ人は儒醫を兼たる人にて經學も龜井派とて一流を成し三十六灘行欲盡。天邊遙見鎮西山。あと云へる詩句は人口に膾炙して九州よてい一の名家ありしが如何ある子細ありけん罪を得て海濱の地に屏居し困窮し陥りしかば傳手を以て隣國なる平戸の城主松浦肥前守の許に此書を獻じ幾何かの合力を受け一時の急を凌ぎました其時道載一詩を賦して之に添へたり

吾家藏明主封豊臣太閣勅書久矣。十

襲珍惜。不肯出師人。以爲無價寶也。獨奈歲壬子。得罪免黜。廢錮數年。尙之以災變。產破而室如懸磬。於是出書獻諸平門侯臺下。蓋欲各寶其寶也。人情至此。不能無感慨。附以短章。

隱士家無儋石儲。徒藏明寶紫泥書。誰圖化作雙黃鶴。鶴爲仙禽。飛入蜚鸞海上都。寬政戊午臘嘉平。辱知 龜井魯拜草

此詩の意は己れ浪人にて一袋の米も持たぬ貧乏なるを空く此希世の珍寶を所持せる處思も寄らず若干の黄金とありて平戸侯の許に入れりと云ふ事あり蜚鸞海上とは平戸の事なり鶴の仙禽たりとあれば雙黃鶴の二千金の様に聞ゆれども左にあらざる當時平戸侯如何に富有なればとて此書の爲めに二千兩を出すべからず況して此頃の大名の金錢の事などは自身も出納せず家來のもの取計ふ事なれば大方十兩か廿兩も遣はされたる事あるべし若し二十兩とすれば今の三百圓位は當るべければ窮を救ふより先づ事足るべし平戸侯も當時は年少あれば此書をば格別珍しき物とも思ひ給はず篋底に仕舞ひ置かれしが後卅年餘も過ぎ隱居して靜山と號し専ら文學に心を用ひ水戸烈公など往來し甲子夜話と云へる隨筆を編輯せられけるが

會々此書を箱の中より見出し始めて其希世の珍物たることを知り給へり然るに又考へ給ふ様此書は唯泛然明人の眞蹟として珍重するの好けれど我先祖法印公は征韓の先鋒を勤め和議の起りし時は不承知にて直に遼水を渡り北京を衝んどの論を主張せられたるも今此方が是の欺罔の書を賣として先公を對し相濟す事あり忠孝の道の實物より大切なれば片時も側置く可からずとて速に道載に返さんとし給へど此時道載は既に故人となり其子何某も此世に居らざれば已むを得ず平生懇意にし給ふ儒者佐藤捨藏に託して然るべき人々贈らんとせられし此の捨藏と云ふ即有名なる一齋先生の事なり松崎慊堂と曰く大學頭林述齋と學び慊堂は退藏と稱せし故林門の二藏と呼びはやされ彼の寛政の三助に比擬せられたる人あり寛政の三助といふ柴野栗山は彦輔と云ひ尾藤二州は良佐と云ひ古賀精里は璞助と云ひ共に助を以て通稱とせしゆる三助といふ呼べり又之を三博士とも云ふあり一齋先生既平戸侯の委託を受け先づ差當り平生講釋をせし出入る水戸烈公の許に持行きければ烈公見給ひて曰く若し明帝が憤怒して書きたる書あれ却て貴ふべきも實に虚傲の書にして兒戯に類せり況して豊太閤の打捨てたる物なるを今此方國君の身分にて之を賣にする時は自ら汚すありとて返

し給ひければ一齋先生復命して其趣を申上げ且曰く諸侯の御身分にて此書を御所藏なされては御失徳に相成るべくも若し平人にして所持する時は却て榮譽に相成り且歴史學の參考より甚肝用ある物に御座候間私に頂戴させ下され度とありければ靜山公も實も思召されけん直に一齋先生に賜ひし一齋先生大悦にて持返り長く愛日樓の所藏とはされり然るに物換り星移り歲月箭の如く一齋先生如何に福壽に富むと雖も天命に勝ち難く七十八と老朽に終に道山と歸りける其子新九郎と云ふ人學問の可なりありたる由かれと業を嗣くの才なく新九郎死して其家分散と成り此書も賣物と出たるゆゑ私も幸に或る處にて一目し此寫を取るふとが出来ました然れ今日の中は昔と違ひ外國人も好事家が澤山ありて金銀を惜まず日本寶物をトシ／＼買込み加之支那公使館などでは眼を皿の様にして此の如き古書を狙ひ搜し居る事あれば若しも外國人の手に落ちては國辱ありと有志の人は私かに心配せし明治の豪商岩崎彌太郎氏が之を聞き附け直に二百圓を出して買取たる由に傳へ聞きたから定めて只今の岩崎家の所藏と之れあるべくと思ひます爰に又一段の話しがありまず初め一齋先生が靜山公の囑託を受けて水戸老公の處へ往きたる時老公問ひ給ふに

太閤怒て封冊を引裂きたる由歴史に見えられ今此論文に破れたる迹なきは如何と云はれければ一齋先生もいまだ其處等の研究のなかりしと見え暫く案じて申す様仰せ御尤に候蓋し海外萬里へ使に參るに其書面一通しか所持せぬと申す事は恐く之れなく必ず副本とあるべければ此書の或る副本にて候いんと云ひしと然れど彼の國の封冊の例を考ふるに朝鮮安南等の屬國を封するに三通の書面あり一に誥命と云ひ二に詔諭と云ひ三に勅諭と云ふ勅諭は即前に讀みたる文あり詔諭は今所在を失へり誥命は伊勢龜山藩主の家に藏すと聞及べり龜山藩主の今の華族石川子爵あり初め太閤が怒て之を地と擲ちし時堀尾吉晴拾ひ得て所藏せしが堀尾氏沒收せらるの際龜山侯は堀尾氏と親姻の縁故あるより因りて終に同家に歸せりと云ふ詔諭勅諭の讀みたるものよりあらざれば裂きたる迹なきの當然ならん征韓偉畧は勅諭をも載せて讀みたるやうに書きあれど恐く誤りてあらん或る人の話に太閤が怒て引裂きたと云ふ後人が勢ひを添へて書きたる迄にて其實の地は獨ちたるなり今此に誥命の寫あり是の寫の又寫めて孫寫か曾孫寫か玄孫寫か分らねば裂きたる迹のあると云ふは他日石川家の原書に就て判定致さん

本書は綾織切地一尺青黄赤白蒲鼠色雜繼

地模機雲鶴

織出ニテ

登り龍

篆書奉天誥命

降り龍

奉

天承運

皇帝制曰聖仁

廣運凡天

覆地載莫

不尊親帝

命溥將暨

海隅日出

罔不率俾

昔我

皇祖誕育多方

龜紐龍章

遠錫扶桑

之域貞珉

大篆榮施

鎮國之山

嗣以海波
之揚。偶致
風占之隔。
當茲盛際。
宜續羹章。
咨爾豐臣
平秀吉。崛
起海邦。知
尊中國。西
施一介之
使。欣慕來
同。北叩萬
里之關。懇
求內附。情
既堅於泰
順。恩可斬
於柔懷。茲
特封爾爲
日本國王。
錫之誥命。
於戲寵賁。

芝函。襲冠
裳於海表。
風行并服。
固藩衛於
天朝。爾其
念臣職之
當修。恪循
要東。感皇
恩之已渥。
無替款誠。
祇服綸言。
永運聲教。
欽哉。

朱印ノ大サ四寸四分四釐ニ制誥之寶トアリ
萬曆二十三年正月二十一日

前ノ朱印ニテ制印アリ

篆書ニテ

萬曆十四年 月 日 誥

切レノ終リニ

萬曆十八年十一月分表背匠金光

織匠郭堂

挽匠周清

此が正しく承兌和尚の讀みたるものなり三百年の今日も
在て之を讀む猶ほ腹の立つ文章あれば況して當時豊太
閤の憤怒せられしも尤もでありませぬか

質 疑

●東洋氏ノ質疑ニ對シ愚見ヲ述フ

千 峯

筆算摘要卷四平均法第二套ノ例解ニ左ノ如クアリト云フ
即チ

$$\begin{array}{r} 30 \overline{) 458} \\ 10 \overline{) 458} \\ 4 \overline{) 458} \end{array} \begin{array}{l} 20 \\ 40 \\ 50 \end{array} \text{答}$$

ニシテ此 4 8 10 ノ比例數ハ如何シテ之ヲ得シ

ヤノ質疑ナリ余ハ此判斷ハ

$$\begin{array}{r} 30 \overline{) 244} \\ 45 \overline{) 244} \\ 84 \overline{) 244} \end{array} \begin{array}{l} 4 \\ 5 \\ 5 \end{array} \begin{array}{l} 20 \\ 40 \\ 50 \end{array} \text{答}$$

ナルヘシト思考ス

$$\begin{array}{l} \text{其證} \\ 30 \times 20 = 600 \\ 45 \times 40 = 1800 \\ 84 \times 50 = 4200 \\ 110 \quad 6600 \\ 6600 \div 110 = 60 \end{array}$$

文 藝

送覆本熊雄歸鄉序

里見助太郎舊作

學友覆本熊雄卒業。將歸其鄉。臨別謂之曰。人之性雖無異
平。至其技藝才能。則不然也。是所以性相近習相遠。而各有
適否。從其所適而學習之。則費力少。成功速。措其所適。從
其所不適。則費力多。成功遲。學者不可不察也。君武藏大谷
村人也。天性溫厚好學不倦。明治庚辰。應徵幕。與余同。入
培玉師範學校。君夙夜匪懈。普通課。畧究其精。今茲壬午卒
業。可謂其所適得宜矣。夫樵夫之斧用之久。而其技益精。教
育之業。亦然。誦之久。其學益詳。若夫不然。則有戕彼人之
子。是亦不可不察也。余於君交情深厚。固非燕遊一朝之交
也。乃陳數言。亦以自警。君往哉。勉旃。

馬杉雲外曰。立論剴切。運毫瀟灑。

吉田宗軌君將赴東陸賦一首送行

男兒立志旅行時。別恨離情曷足悲。更遇錦衣歸國日。間花

月夕、舉金、厄。

成田八洲曰。豪放其人可想。

冬夜讀書

飛雪紛々滿草廬。祇應我輩惜三餘。棲禽驚罷宵過半。屏燭窓前獨讀書。

土居香國云。我輩項門一賊。

雜 錄

●算盤ニ就テ

島 水生

珠算ハ我國ノ長術ナリ算盤ハ我民ノ要具ナリ蓋我經濟ノ消長ハ唯此一術一具ノ利用如何ニ存スト云フモ敢テ認言ニアラサルヘシ然ルニ世珠算教授ヲ輕ンシ重キヲ算盤ニ置カサルモノ多シ民育上經濟上長大息スヘキコトナラスヤ

抑用具ノ便否ト其成效トノ關係ハ恰モ影ノ形ニ伴フカ如ク而シテ其便利ナリト稱スルモノハ必人智ノ程度ニ適應スルノ事情ヲ具備スルヲ常トス是レ蓋シ器具改良ノ常ニ人智發達ニ隨伴スル所以ナルヘシ

然リ而シテ從來時ニ或ハ珠算教授ニ頭痛ヲ病ミタルハ計算器即十露盤ヲ其古ニ適シ今ニ適セサルアルニ基因セスンハアラス今余ノ工夫シタルモノハ一桁五顆ヲ有スルモ

ノニテ(普通小學用ハ十七桁)之ヲ島水算盤ト云フ、此算盤ノ特徵ニアリ

一、一桁九數即梁上顆(イ)ナル五珠ヲ下シ梁下顆(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)ノ四ヲ上クレハ九ヲ表スル(圖略ス)

二、脊梁面ノ朱漆塗、框上面ノ銀頭及無底

島水算盤ハ右ニ特徵アルニヨリ左ノ利益アリ

一、顆數ノミニテモ六分一乃至七分一ヲ減シ猶普通二十一分ノ四ヲ減スルヲ以テ價廉ニシテ最多數國民ノ購求ニ適ス

二、盤面ノ幅及長サヲ減シ且四桁毎ニ竹籤ハ框ヲ貫通シ鎮留セラレ下面ニ鎮板アリ亦盤面反轉竹籤脫離ノ弊ナシ三、從來ノモノニ比シ容積小サク其重量減セリ故ニ持參ニ便ナリ特ニ十三桁(十一桁モ)ナル懷中盤ハ最行商者ニ適ス

四、從來常ニ塵埃堆積小蟲蟻居ノ弊アリシハ珠顆ノ上下ヲ妨ケシノミナラス教育用具トシテハ不適當ナリシカ無底ナルヲ以テ其憂ナシ

五、我現時ハ既ニ數標九ニテ百用足レリ例ヘハ我商業社會ノ通符丁久シク九個ナルカ如ク普通ノ算盤使用者ハ其最下珠顆一列ニ着指セサルヘシ故ニ最下一列顆ハ即無要顆ナリ故ニ一桁九數ナル島水算盤ノ便利ナル敢テ多言

ヲ要セス加之島水算盤框上面ノ銀頭ハ以テ定位ニ利用スヘク其赤漆梁面ハ隨時必要文字ヲ記入シ亦之レヲ消去シ得ルノ便アリ

六、教授的能力經濟即教授者ニ便ナリ

七、受教の腦力經濟即受教者ニ便ナリ我算界ハ今日盤面ニ於テ五ノ數及十ノ數ヲ二重ニ顯ハスノ必要ナシ然ルニ猶之ヲナス實ニ見ルニ忍ビサルモノアリ之レヲ五珠教授ニ例セシニ先ツ數ノ觀念ヲ得セシメ後其計算の代理トシテ之レヲ珠數ニ布カシメ四、五、六、五、六、或ハ四、五、五、六等ノ順序ニ進歩スルニヨリ(一)梁下五顆ハ計算の算標ナルノ念受教者腦心ニ存スルニモ係ラス(二)教授者ハ此五顆ノ代リニ梁上一顆即五珠ヲ用フト云ハサルヘカラサルニヨリ(三)受教者ハ數標ノ重複(此レモ數五ノ代リ彼

モ數五ノ代リ)及實ト虛トノ混同(數ノ代リニ標珠ヲ用ヒ其五顆ノ代リニ猶他ノ一顆ヲ用フ)ニ眼クラミ氣迷ヒテ其理會ニ艱ミ苦心的教授ヲ受クルト雖モ五珠ノ觀念ヲ印スル淺弱ニシテ器械的運算即計算拙劣ノ礎ヲナスモノアルカ如シ然ルニ島水算盤ハ圖解ノ如クナルヲ以テ此困難ナル迷路ナシ故ニ教授的受教の兩腦物ノ經濟物タルヲ明ケシ島水私ニ無學兒童及學内兒童ニ就キ種々工夫ヲ凝ラシ十以內ノ加減法ヲ熟練セシメタルニ島水算盤ハ實ニ五

分一乃至六分一ノ時間ヲ減スルヲ發見セリ以テ腦力ヲ徒費セサルヲ證スヘシ亦以テ其教ヘ易ク受ケ易キヲ見ルヘシ猶島水算盤ノ梁面ニハ無文字ナルヲ以テ圓錢等ノ文字ヨリ桁ヲ器械的ニ使用スルノ弊ナク進ンテ器械的運算ノ憂ナク以テ心力ノ發達ニ適合シ充分ニ活用セシムルヲ得ヘシ

右約言スレハ島水算盤ハ實用ニ適シ經濟ニ叶ヒ最教授ニ便ニ且普及ニ利アリ愚見斯ノ如シ尙識者ノ教ヲ乞フ

●願はくハ教ヘよ

東洋居士

疑ハシキとありとも問はで止まんは何の日か之を解くとを得べき居士今三君に對して少々疑あり敢て之を問はん無禮として怒ると無く懇に教を垂れたまは幸甚 廿五年七月十二日

先、石田福太郎君に問はん君は本誌第百六號の論說欄内ハ高キニ登ルニ卑キヨリスと題して妙あることを述べられたり七歳八歳の兒童は果して青緑の別を知らざる歟辛酸の別を知らざる歟三と四との多少を知らざる歟父子兄弟の關係を知らざる歟然り果して知らざるなりといひ君が一己の臆斷説として立波は冒頭に鳴らされたる妙言ならん七八才の兒童も種々あらん今假し未就學の者と做すも三の少よしして四の多ある位のと既知りつらん辛子唐

辛子の味辛くして梅柚子の酸味なる位の區別は十分は知りつらん我と彼との父子にして我とは兄弟なり關係然れども其とは父子に非ず兄弟に非ず赤の他人なり位のとい既十分は熟知するならん其の青と緑とは混同し易きも而も二色を並べて之を問ひて二者其間に區別ありて不等なるを知らん唯縁と云ふ名を知らざるはあらん居士亦教授に携はると此に十有五年初學の幼兒を扱ひしと亦少からずされども君が臆断せられし如き白痴の小兒ハ未居士の眼孔に入らざりしあり居士不敏幸に教を垂れよ次に中村忠誠先生に伺はん 近年國文學の勢熾盛になりたるより泛々漢洋學者にいたる迄妄に國文の口調を學びコソのタレのど木も竹接ぎたらん様の文をく人多くあり彼の國民之友、日本人の名の記者どもが何テフツ、文テフ者ハ杯様にムヤミタラにテフと云ふ語を使用したりしより以來時好に投せし彼雜誌のどとて其ゴテフ調と音は忽世の模倣する所と爲り奇玉の山人平澤の金之助氏の如きは殊々好んで之を學ばれたり抑テフハトイフの約まりたる語にして地方も今も行へる、テフは蓋此の轉訛歟本居宣長先生の言へりきテフハ歌に用ゆれども文には用ゆべからず歌は文字ハ制限あれば約めて用ゆる止を得ざるあり居士之を誦し試むるに衣ホステフ天ノ香

久山、戀ステフ我が名ハマダキ立チニケリ、語路圓熟して少しも耳立たず然れども先生の凡話シテフモノハ、奇玉の平澤氏が身チ寄スルテフ予、明治廿三テフ年、教諭テフ職、平澤テフ人の如き何れも語勢促進して耳障りて嘔吐を催し來ると切あり若し歌に於てトイフと延べて言はんも少しも耳障りあると無し、宜山風ヲ嵐トイフラン、且先生の豊太間明の封冊の話の一篇は其演説の筆記といへば先生の話を其儘文字に寫したる者あらん果して然らば先生は日常の談話に於て常ニテフハトイフのを用み玉ふ歟居士ハ思ふ先生亦俗人の妄用を學びて此に至りし歟を教を賜ひ幸甚 奇玉の平澤氏今は遠く鹿島に在る妄用する理猶伺ひ度ハ實事求是の學と云ふ居士ハ奇玉氏由を教へよう猶伺ひ度ハ實事求是の學と云ふ居士ハ奇玉氏云ふ者とあり序に申度ハ先生の御詞あり、残念至極ノ事ニテハアリマセンカカを濁りたり無理ナラヌ事ニテハアリマセヨカ我々ハ日常の話に於てデと言ひてニテと言はず先生亦然らん果して然らば是ハ筆記者の誤歟、抑筆耕者の誤歟居士ハ二者の中あらんを信ずれども漢學を以て有名とし且能文の聞高き先生のとにしあれば何が説あらんを疑ひ遂に伺ひ奉る次第に至りぬ願ひくハ無禮と云ふ怒り玉ひふ其の封冊の文と云ふ者に就きては亦少し意見あり高話の完結を待ちて述ぶるとあるべし

登筑波山、宿大洗、二首とも、○をベタ平と附けたり誰人が批しども斷なきを以て視れば蓋耕夫自贊の點歟果して然らば其の自贊の點も中々に妙なれと謂はん如何く

雜 纂

●町田尋常師範學校校長 同校長にハ本縣下見玉、賀美、那珂三郡の各小學校視察のため本月十日過より凡そ二十日間を期し巡廻する筈なりと云ふ

●單級教授法研究會 同會ハ去月廿七日より本月三日まで在鎌倉、神奈川縣尋常師範學校内に於て開設せられ會員は第一地方部附屬小學校主事及訓導講師ハ東京府尋常師範學校校長野尻精一氏にして女子高等師範學校教授篠田利英氏及高等師範學校教諭波多野貞之助氏等にも參會せられ其研究事項は單級教授法及二學年を合して一學級とせしもの、教授法にして本縣尋常師範學校よりは訓導須永和三郎氏出張を命ぜられたり

●小學校教則研究會 同會ハ去月廿二日南埼玉郡粕壁町高等小學校内に於て開會町田本縣尋常師範學校長出席し當日會せし者は凡五拾名許にして教員、町村會議員及有志者等ありしと云ふ吾人の斯る會の各所ハ設立せられんことを希望して止まざるものあり

●教員檢定 本縣に於て先般來教員甲種檢定出願者

第三の田口幸吉君に問はん 君には始めて本年の總集會席上に於て面謁したり君の其顔の廣さがどく其心も亦寛く前の筆戰の騒い少も口頭に上さざりき居士ハ其寛大を知る故に此に亦少々物申さんと思ふあり君の漢文は觀三氣賀補養會記に於て始めて拜見するを得たり君の此文純乎たる漢文としてハ迎も觀られぬも亦漢文の法に従ひて文字を排置したれば居士ハ之を稱して亦漢文と謂ふされど居士ハ泛々の漢文家を氣取り其の字其の句の不穩妥處を摘抉せんと欲する者に非ず唯其の稱呼の不當を質さんと思ふなり君は先に次贊成員中村氏出演題と言ひ後ハ三處とも先生と稱したりア、後に先生と稱し得べき人ならば其の始に於ても亦先生と稱すべし何テ氏と謂ふべけんや君ハ秩父郡の英物あり傑人あり少ハ説の有るとあらん願ひくハ凡俗の東洋居士に聞かしめ玉へ敢望蓋以上の三氏は現代知名の士なり此知名の士ハ向ひて詰まらぬ質問を提起すると聊敬を失ひ禮を無するの嫌なきよし非ずと雖分かれぬとを分かれぬとして措くものなら何の日か分かる時の有る可き故に敢て筆を取て教を乞ふと右の如し三氏幸に諒する所あれ

序を以て若園耕夫に物申さん 詩文の圈點は其の妙な處味ある處に附すると前代よりの慣例なり今耕夫の

小學校本科正教員免許狀

郡内野清太郎

圖畫音樂南埜玉郡町田理吉

北培王君大澤嘉助 榛澤郡小

同縣左之 七 同縣左之 七

南城王郡吉田元次郎入間郡

里邨所并廣言
同耕夕前腸之良
同耕孳孳孳孳

秦翠郎野口繁吉 同郎真下

10

南埼玉郡伊藤英良 同郡森芳五郎 北葛飾郡丸山辰之助
同郡加治孝松

大里郡奥山半彌 入間郡稻吉綱五郎 兒玉郡宮崎善二郎

明治廿

24

京都府

神奈川縣

長崎縣

埒玉縣

千葉縣

初才縣

10

福岡縣

佐賀縣

鹿兒島縣

合計

珠算改訂

珠算改訂

我小學校教科目中其存廢變更常ナラス徒ニ學童ヲシテ貴

亦甚憂慮二堪へサルモノハ何ソヤ珠算即チ是レナリ珠

シ然ニシテ塵スヘカラサルモノナルカ確然之ヲ維持セ

結果ニ陷井ヲ充分ニ其効用ヲ顯ハサシメタル者ハ其ノ

珠算ハ我邦ノ世態ニ於テ決ツ之ヲ廢止スルヲ得

THE

11

ス故ニ農ニ工ニ商ニ一トシテ算盤ヲ用井サルハナキコト
毫モ昔日ト異ナルナシ、サレハ假令ハ小學校教科目ニ
珠算ヲ廢スルモ我等ニ代リテ此社會ヲ有スル所ノ兒童ハ
外部ノ必要ニ迫ラレテ勢之ヲ學ハサルヲ得サル可シ嗚呼
珠算ノ必要ニ可カラサルヲ夫レ斯ノ如シ既ニ此必要アリ
然ルニ其存廢變更常ナラスシテ甚シキハ珠算ヲ教ユル
ハ却テ算算ノ効果ヲ減殺スルモノナリト斷定シテ愛憐ナ
ル兒童ヲ試驗的ノ犧牲ニ供スルニ至ル實ニ堪ヘサ
ルナリ是ニ由テ之ヲ觀レハ珠算ノ用法并ニ教授法ヲ改良
スルハ寔ニ今日ノ一大急務ニシテ苟モ身教育ノ任ニ當ル
ノ士ハ百万之レカ法案ヲ講究シ完全ナル用法並ニ其教授
法ヲ案出セスシテ可ナランヤ我輩有志者ノ本會ヲ設立ス
ルノ趣意實ニ此ニ在テ存ス世ノ教育者諸君ヨ諸君カ最愛
ナル百万ノ兒童ハ今日憐ム可ク哀ム可キノ犧牲ニ供セラ
レツ、アルニアラスヤ希クハ本會ノ學ヲ贊シ以テ其目的
ヲ達セシメンコトヲ是レ唯タ本會ノ爲メノミナラス實ニ同
胞四千万ノ幸福ナリ

珠算改良會假規則

第一條 本會ノ目的ハ珠算運珠法ノ改良ヲ計リ併セテ其
教授法ヲ講究スルニ在リ○第二條 本會ハ珠算改良會ト
稱ス○第三條 本會ノ目的ニ同意ノモノハ何人ニ限ラス
會員タルヲ得○第四條 令開アル數學家又ハ名望アル
人ニシテ本會ニ裨益アリト認ムル者ハ客員トス○第五條
會員ハ珠算運珠法及其教授法ノ改良ニ就キ講究シタル

染谷保次郎 石川 傳平 河野 芳男
池田 義郎 關口 甚吉

協議決定事項

一 教授週録及生徒性行錄用紙出版の事
支會ニ於テ出版の事ト決す

但し二種共美濃紙にして高等尋常兩用の事

二 算術作文地理史談(本郡内)の生徒用教程を編纂する事
其方法算術作文地理史談の三に區分シ其材料ハ各學校
に依頼して之を集め會長の指名を以テ委員十名以上を
選ビ編纂すると各學校よりハ從來生徒に課せしもの及
課するニ適當と信するものを算術科ハ於テは尋常二學
級用三學級用四學級用高等二學級用三學級用及女生單
級と區別シ各數題を地方幹事に送ると作文科ハ於テも
亦此の如く區別シ文題及作例を地理史談ハ各村に於テ
要用なる事項及少しく著名なる事實を取調べ同じく幹
事に報ずると
右明治廿六年一月の總會に提書すると
三 水利土功の事を或る教科の内ニ加ふるの可否
右の可否ハ委員に於テ調査し同じく總會に於テ決する
と

生徒教程編纂及水利土功に關する調査委員

只見 秀質 本間 金藏 大作 棟次郎
針ヶ谷 米吉 河野 芳男 池田 義郎
田中 勝藏 坂本 八郎 中野新右衛門

結果ヲ本會ニ報告スルモノトス○第六條 會員ハ入會ノ
節入會金貳拾錢ヲ納ムルノ外會費ヲ要セス○第七條 本
會ノ記事ハ當分「數學報知」ニ掲載スト雖特ニ必要ノ件ハ
直チニ本會ヨリ報告スルモノトス但シ數學報知ハ本會員
ニ限リ特別ニ割減ニテ購求スルコトヲ得○第八條 本會
ハ左ノ役員ヲ置キテ會務ヲ處理ス 會長一名會員中ヨリ
之ヲ推撰シ會務ヲ總理ス 審查員若干名會長之ヲ委嘱シ
會員ノ報告等ヲ審查ス 幹事三名會長之ヲ委嘱シ會務ヲ
掌ル 書記一名會長之ヲ委嘱シ會務ニ從事ス○第九條
會長ハ此規則ヲ執行スル爲細則ヲ定ムルコトヲ得
東京市京橋區竹川町十四番地

珠算改良會事務所

●埼玉私立教育會葛飾支會の通信 同會ニ於
ては去月十日中葛飾郡南郷井村に於テ常會を開キ左の事
項を決議したり當日出席會員三拾八名にして會頭須藤周
三郎氏は新小學校令實施に關する要件を述べられ會員石
川傳平氏にハ郷土に關する地理史談と掲げ一場の演説を
かし終りハ會員染谷保次郎氏は目下本縣教育上ノ一大問
題たる尋常中學校々數位置に關シ緊急動議を提出シ全會
一致の同意を得テ縣知事ニ建議すると同時に各縣會議員
に通知シ熟慮を乞ふると決議し會頭は左の五名を以テ
起草委員ヲ指名したり而して建議の要領ハ本縣内ニ設置
する尋常中學校數を本校一、分校一とし其位置を北足立
郡大宮町大里郡熊谷町の兩所とするにあり

宮島 靜吉 山高 次郎 田口 嘉吉郎

葛飾學校一年紀念會

北葛飾郡杉戸町高等小學
葛飾學校の新築落成ハ實に昨年七月廿三日にして即ち一
週歲に相當するを以テ去月廿三日當時新築に幹旋せし人
々を招待し紀念會を催ふせり當日須藤郡長は學務主任を
隨ヘ臨場し祝辭を演べ本校職員及生徒總代の祝辭あり終
りて來賓へは立食の饗あり生徒一同ハ茶菓を賜はりた
り (關口甚吉君報)

埼玉私立教育會南埼玉支會

同會ハ客月三日
常會を柏壁町小學校に開キ會員三十餘名ニ達シ炎暑甚し
きにも係はらず一日中倦まず教育談をなし午後六時全
會を閉ぢしと云ふ會員の熱心思ふべし (高橋榮次郎君報)

入間高麗郡諮問會

伊藤入間高麗郡長ハ六月十
二日より十四日まで三日間郡内各小學校首坐訓導を召集
し左の項を諮問せられたり

- 第一、教科目の教授細目ニ關する事
- 第二、教授週録及兒童性行錄調製に關する事
- 第三、毎日の教授時間に關する事 教科目加除の場合
- 第四、兒童就學初年の教授時間に關する事
- 第五、臨時試驗に關する事

右第二より第五までの直に諮問に答へたれども第一ハ甚
だ重大なる事故委員十名を舉げ其委員ニ於テ充分なる調
査を遂げ本學年中に答ふる事とありたり

●辭令

(進藤政齊君報)

任秩父郡名栗村立第一尋常小學校訓導 長谷川庫松
(十等下級俸)
秩父郡名栗村立第一尋常小學校訓導 吉田磯次郎
任秩父郡名栗村立第三尋常小學校訓導(九等下級俸)
南埼玉郡江面第一尋常小學校訓導 龜田 貴德
任南埼玉郡江面第二尋常小學校訓導(十等上級俸)
兒玉郡阿久原尋常小學校訓導 島田安蘇太郎
執務時間制限外ニ於テ補習科教授擔任ニ付報酬トシテ月
額金壹圓五拾錢給與
南埼玉郡大野島尋常小學校訓導 岩上丑太郎
同上月額金壹圓給與 (以上六月中)
高麗郡原市場尋常小學校訓導 鈴木 市松
任高麗郡赤澤尋常小學校訓導(十等下級俸)
任入間郡所澤尋常小學校訓導 長谷川嘉藏
(十等下級俸)
埼玉縣小學校訓導 新幡篤次郎
任入間郡入西尋常小學校訓導(六等下級俸)
同 關 仁之吉
任入間郡入西尋常小學校訓導(十等下級俸)
同 塚越千代松
任兒玉郡東兒玉尋常小學校訓導(八等下級俸)
同 田中格太郎

任兒玉郡東兒玉尋常小學校訓導(十等上級俸)
任兒玉郡渡瀬尋常小學校訓導(十等上級俸) 阪庭清一郎
任兒玉郡眞林尋常小學校訓導(十等上級俸) 福島鹿次郎
任秩父郡清水川尋常小學校訓導 望月 久知
任秩父郡刀水高等小學校訓導(五等上級俸)
同 細田芳太郎
任秩父郡刀水高等小學校訓導(十等上級俸)
埼玉縣小學校訓導 島崎眞十郎
任男衾郡小原尋常小學校訓導(八等下級俸)
同 朝倉 亮全
任男衾郡小原尋常小學校訓導(十等下級俸)
任北埼玉郡不動岡尋常小學校訓導 島海 和吉
(十等下級俸)
北足立郡芝尋常小學校訓導 笠原伊左衛門
北埼玉郡廣間尋常小學校訓導 武井 末松
九等上級俸給與
秩父郡名栗村立第一尋常小學校訓導 神能德次郎
任秩父郡名栗村立第二尋常小學校訓導(九等上級俸)
埼玉縣小學校訓導 北爪 義勝
任秩父郡深谷尋常小學校訓導(六等上級俸)
同 大澤 由松
任秩父郡深谷尋常小學校訓導(九等下級俸)
同 田島増太郎
任秩父郡深谷尋常小學校訓導(十等上級俸)

同

任北埼玉郡行田尋常小學校訓導(八等下級俸) 市川恒次郎

同

任北埼玉郡進修館尋常小學校訓導(八等下級俸) 片山福三郎

同

任北埼玉郡佐間尋常小學校訓導(十等上級俸) 國分 豐馬

入間郡堀兼尋常小學校訓導 奧富 庄吉

任入間郡堀兼尋常小學校訓導(十等下級俸)

入間郡所澤尋常小學校訓導 江口忠太郎

任入間郡入西尋常小學校訓導(十等下級俸)

任秩父郡皆野尋常小學校訓導 橋上 旗輔

(十等下級俸)

埼玉縣小學校訓導 久米玉五郎

同 横田 嘉作

任秩父郡國神村立尋常小學校訓導(九等下級俸)

秩父郡影森尋常小學校訓導 新井半兵衛

任秩父郡影森尋常小學校訓導(十等下級俸)

任秩父郡大河原尋常小學校訓導 齋藤 村吉

(九等下級俸)

秩父郡櫻澤尋常小學校訓導 町田 信平

任秩父郡櫻澤尋常小學校訓導(十等下級俸)

任秩父郡新會尋常小學校訓導 小澤 佐源太

(十等下級俸)

任秩父郡刀水高等小學校訓導 鹽野寅次郎

(十等下級俸)

任北埼玉郡成田尋常小學校訓導

(十等下級俸)

同

任南埼玉郡武里尋常小學校訓導(十等下級俸) 後藤 金八

任南埼玉郡武里尋常小學校訓導(十等下級俸) 關根 逸三

任北葛飾郡郁文尋常小學校訓導(七等下級俸) 坂本 八郎

任北葛飾郡郁文尋常小學校訓導(十等下級俸) 中野 榮吉

任北葛飾郡郁文尋常小學校訓導(十等下級俸) 鈴木利太郎

任北葛飾郡上高野村立尋常小學校訓導(十等上級俸) 川崎 茂助

北足立郡三橋尋常小學校訓導 田島 榮七

依願退職ヲ命ス 秩父郡櫻澤尋常小學校訓導 田島 榮七

南埼玉郡小林尋常小學校訓導 島田清一郎

執務時間制限外ニ於テ補習科教授擔任ニ付報酬トシテ月

額金四圓給與 兒玉郡第一金屋尋常小學校訓導 高松 倉吉

同上月額金貳圓給與 秩父郡新會尋常小學校訓導 小島 正中

同上月額金壹圓五拾錢給與 兒玉郡青柳尋常小學校訓導 上田 樂三郎

同上月額金壹圓貳拾錢給與 賀美郡乾武尋常小學校訓導 木村源次郎
 同上月額金壹圓三拾錢給與 秩父郡三澤尋常小學校訓導 田島 善吉
 同上月額金壹圓給與 南埼玉郡增富尋常小學校訓導 神田 平策
 同上月額金壹圓給與 埼玉縣小學校訓導 榎島定次郎
 任北足立郡谷田尋常小學校訓導(八等下級俸) 小島定之助
 任入間郡谷中尋常小學校訓導(十等上級俸) 山田佐十郎
 任入間郡鴨田尋常小學校訓導 (十等上級俸)
 同上 (十等下級俸) 佐々木徳久
 任那珂郡秋平尋常小學校訓導 吉川 鍋六
 任北埼玉郡戸室尋常小學校訓導 鈴木直次郎
 (十等下級俸)
 南埼玉郡慈恩寺尋常小學校訓導 福原榮之助
 任南埼玉郡慈恩寺尋常小學校訓導(十等下級俸)
 入間郡柳瀬尋常小學校訓導 木下 慶次
 九等下級俸給與
 同 南埼玉郡慈恩寺尋常小學校訓導 小島 八郎
 比企郡高坂尋常小學校訓導 鷺澤 箕助
 十等下級俸給與

同 北葛飾郡豐野尋常小學校訓導 井上 榮助
 北足立郡三橋尋常小學校訓導 川崎 茂助
 執務時間制限外ニ於テ補習科教授擔任ニ付報酬トシテ月額金三圓給與
 秩父郡大河原尋常小學校訓導 友道 銳馬
 同上月額金貳圓給與 兒玉郡渡瀬尋常小學校訓導 阪庭清一郎
 同上月額金壹圓三拾錢給與 幡羅郡蓮沼尋常小學校訓導 小暮佐久平
 南埼玉郡増林尋常小學校訓導 根岸 新藏
 同 郡吉羽尋常小學校訓導 山本徳三郎
 同上月額金壹圓給與 榛澤郡本郷尋常小學校訓導 田中島吉三郎
 同上月額金貳圓貳拾錢給與 (以上七月中)
 ●本縣尋常師範學校春期修學旅行記事
 緒言
 明治廿五年三月定期試験既ニ畢ハリ校規ヲ以テ修學旅行ノ學アラントス期ニ先ツ二日町田校長諸生ヲ講堂ニ集メ謂テ曰ク將ニ茨城地方ニ向テ行軍セントス其経路ハ小山結城下館筑波笠間水戸太田ヲ經テ那珂港磯濱ニ至ル或ハ一泊或ハ二泊シテ發火演習ヲ其間ニ行フヘシ諸子須ク體ヲ鍛リ氣ヲ養ヒ且ツ歷史上ノ遺蹟ヲ探リ地理ヲ實地ニ究メ理科博物ニ於テモ亦十分ニ研究スル所アルヘシト地圖ヲ掲ケテ殷勤ニ指示セラレタリ蓋シ此行タル我々職員生

徒相共ニ春和ノ日子ヲ其心身上有益ノ事ニ使用スルニ在リ故ニ旅裝ヲ兵式ニスルト雖トモ單ニ峻山曠野ヲ跋涉シ或ハ實地演習ヲ爲シテ以テ其筋骨ヲ強壯ニスルノミニ非ラサル也抑モ我等ノ校内ニ在ルヤ常ニ諸般ノ學術ヲ修ムト雖モ他境ノ人情風俗ヲ觀察シ珍異ノ現象ヲ研究スル等ニ至リテハ未タ微シ能ハサル所也蓋シ其外ニ在ルニ方テハ所在ノ動物植物礦物等ヲ採集シ或ハ天然ノ美景ヲ描寫シ凡テ各般ノ諸現象ニ注目シ或ハ英雄偉人ノ古蹟遺物ヲ探檢シ其常ニ校内ニ於テ修ムルモノヲ舉ゲテ悉ク之ヲ實驗ニ徵スルヲ得精神快活ノ裡自ラ諸學術ノ價值ヲ識得シ併セテ一年間苦學ノ疲勞ヲ一洗スヘキナリ加之軍技ヲ演シテ其志氣ヲ鼓舞シ或ハ巍然タル高嶺ニ嘯キ廣漠ナル自然ノ土地ヲ知リ或ハ蕩々タル大海ヲ望シテ其胸襟ヲ開廣ニシ心思ヲ壯快ニスル等此行ノ我等ニ裨益スル鮮少ナラス且夫我等ノ校内ニアルヤ嚴正ナル規律アリ職員ト相接スルハ僅ニ教授ノ際ノミニシテ其師タリ弟タルモノハ間ニ於テ隔靴ノ憾ナキ能ハサルモノアリテ存ス此行ニ至リテハ宿泊ヲ一ニシ眠食ヲ共ニシ規律一途其親密ノ情ヲ加フルモノ亦校内ニ在ルノ比ニ非ラス薰陶ノ及フ所モ亦實ニ淺鮮ナラス此行我等ニ裨益ヲ與フル斯クノ如ク夫レ大ナリ聊カ其間ノ見聞スル所ヲ記シテ以テ編簡トナス是行日子ヲ費ス九日往返經ル所ノ行程鐵路一百三十哩陸路三十三里余
 明治廿五年春期修學旅行日記

三月二十八日 月曜 淡曇
 起床午前五時全四十分朝食畢リ六時二十分喇叭ノ聲ト共ニ校庭ニ整列ス
 校長教官 六人 書記 一人 生徒 九十八人
 喇叭手 一人 小使 一人
 共計 一百人(大井豊永兩教師ハ先ニ發ス)
 先ツ中隊ノ編制ニヨリテ四小隊ニ分チ江崎教師指令官タリ靴聲喇叭ト相和シ進ンテ停車場ニ至ル
 七時十一分發ノ一列車ニ搭シ流笛一聲忽チ大宮ニ至リ中仙道線路ヲ右ニ分レ蓮田、久喜、栗橋ヲ過ク停車場ノ傍ニ線路ヲ距ル十歩許リノ處ニ一小碑アリ源判官義經ノ妾靜ノ墓ナリト一片ノ碑アリ圍フニ大垣ヲ以テシ兩三ノ老松其側ヲ擁ス宛カラ昔ノ忍ハシト見エ衆一齊ニ唱ヘテ曰ク
 しづのをだまきくりかへし昔を今とらひけん其世の
 様い知らねども思ひやることをわれなれ
 今此墓ノ由來ヲ聞クニ判官ノ奥州ニ逃ルハヤ靜遙ニ跡ヲ慕ヒテ來リシカ遂ニ利根川ニ溺レ其屍此岸ニ漂着セルヲ以テ土人ノ之ヲ慰ミ此處ニ葬リシト云フ此說ノ眞偽ハ今証シ難シト雖モ靜春戀ノ餘此邊ニ迄足ヲ寄セシト或ハ然ラシト暫ク記シテ以テ後考ヲ待ツ
 栗橋ヲ出發シ間モナク有名ノ鎮橋ヲ渡ル橋製堅固長サ貳百間ト稱ス之ヲ越ユル時間ハ五十五秒ヲ要セリ目ヲ車窓ヨリ放テハ時恰カモ八時頃太陽天ニ昇リ利根ノ流ハ洗滌

トシテ鏡ノ如ク帆船ノ來往遠近ノ景物皆一眺ノ中ニ落ツ
坂東太郎ノ巨觀ハ蓋シ此ニ在ランカ
八時五十分柗木縣下小山ニ着ス此處ニテ水戸線ニ乗換
ル小山停車場ハ雨毛線日本鐵道線水戸線ノ三線アリテ十
文字ノ線ヲ成シ東ハ水戸ニ北ハ宇都宮ニ西ハ柗木ニ南ハ
東京ニ向フヲ以テ頗ル煩雜ナリ
遠望スレハ甲武諸山ハ烟霞ノ裡ニ沒スレハ富士ノ高峯ハ
尙ホ西天ニ聳エ而シテ筑波山ハ南ニ秀テ近ク前面ニアリ
テ我等ノ行ヲ迎フルカ如シ因テ双眼鏡ノ力ヲ藉リ親シク
實見スレハ我カ秩父ナル武甲山ニ髣髴タリ双峯屹立シ岩
石處々ニ散見スルヲ見ル彼ノ武甲ノ諸峯ニ對峙スルモノ
ト異ナリテ獨リ東海邊ニ雄視ス嗚呼亦山岳ノ其地ヲ得タ
ルモノト謂フヘシ
九時十分發全ク三十分茨城縣下結城ニ着ス大井豐永兩教
師此地ノ小學校教員栗原某ト共ニ此ニ待ツ即之ニ從テ處
々ヲ廻覽セリ栗原某ハ當地ノ舊蹟等ヲ懇ニ案内セラレタ
リ
結城町ハ市坊三十東西二十町南北一里十九丁戸數二千以
上人口二万許リ町並不齊ニシテ街道狹隘ナルヲ覺ユ往々
此地ノ名産ナル紬及ヒ木綿ヲ織ルノ家ヲ見タリ
町ノ西ニ稱名寺アリ寺ハ甚タ宏大美麗ナラスト雖モ七百
年前ノ創建ニ係リ頗ル名刹トス境内ニ古城主結城七郎朝
光ノ墓アリ碑石ハ三重塔ニシテ石ノ高サ六尺許リ圍フニ
木柵ヲ以テス

大井教師ヨリ結城家ノ顛末等懇々談話セラル朝光ハ小山
朝政ノ第二子ニシテ千葉常胤等ト源右大將頼朝ヲ佐ケテ
功アリ因テ此地ニ封セラレ關東八家ノ一ト稱シ威名當世
ニ輝ケリ此寺モ其開基ニ係ルト云フ
町ノ西北ニ當リ新川ト稱スル一小流アリ其橋ヲ西町橋ト
云フ結城ヨリ小山ニ至ルノ間道ニ當リ戊辰ノ役ノ古戰場
タリ大井教師ヨリ詳ニ懇話セラル人煙斷絶彌望際ナシ只
麥隴ノ蒼々タルノミ明治元年結城藩士分レテ二派トナリ
一ハ勤王黨ニシテ家老小塙兵馬之カ首タリ一ハ佐幕黨ニ
シテ亦夫々有力ノ首領アリ是時城主水野日向守(勝朝)ハ
江戸ニアリ佐幕黨相謀テ城主ヲ擁シテ勤王黨ヲ殲サント
相率井テ江戸ニ向ヒケレハ勤王黨以テ逃走セリトシ終ニ
城ニ占據ス既ニシテ佐幕黨ハ城主ヲ擁シテ來ル勤王黨橋
ヲ斷テ之ヲ拒キ双方各百五十人アリテ午前六時頃ヨリ午
後四時頃迄砲戰シ勝敗決セス然ルニ勤王黨ハ其主ニ敵ス
ルヲ欲セス終ニ退テ城ヲ去レリ是ニ於テ佐幕黨城ニ入リ
戰終ニ止ミケリト云フ橋ノ西一町許ニ古杉アリ銃丸ノ痕
跡今猶存ス嗚呼二十余年前修羅場裏ニ流レタル腥血ハ禾
穀吸盡シテ太平ノ風ニ化セリ又其傍ニ將軍塚アリ傳ヘ言
フ源頼朝ノ墓ナリト蓋シ公ノ屍ヲ埋メシニ非ス所謂逆修
ノ墳ナラン
十時二十五分結城小學校ニ至ル此處ニテ旅裝ヲ脱シ暫時
休息シ安穩寺ニ行キ十一時五十分ニ還テ中食ヲナセリ恰
カモ試驗后ノ休業ニテ授業ハナカリシモ教員ハ皆出勤シ

生徒ノ成績ヲ調査セリ校舍ハ頗ル大ナレハ生徒モ相應ニ
アルヘケレトモ其内部ヲ知ルニ由ナシ校庭ハ充分ニ廣ク
シテ生徒ノ運動ニハ差支ナカラン

結城山安穩寺ハ町ノ西北ニアリ我等皆靴ヲ脱シテ堂ニ上
ル寺僧出テ説明ス該寺ハ聖武帝ノ時祚遷禪師ノ開基タリ
爾後永ク眞言律師ノ寺タリシカ結城八代直光ニ至リ大ニ
禪宗ヲ好ミ此寺ヲ改宗セントス時ニ源翁和尙那須ノ殺生
石ヲ退治シ德高キヲ聞キ迎ヘテ住持トナセリト是ヨリ以
後禪宗寺院トナレリ寺僧又寶藏ノ古物ヲ出シテ觀覽セシ
ム

一後小松帝ノ宸筆結城山ノ額(楷書) 一後小松帝ヨリ
源翁和尙ニ賜ハリシ寶劔(長一尺計三條宗近ノ作滿面
鍔ヲ生ス) 一天武帝御親筆ノ大般若經 一源翁和尙
ノ拂子 一涅槃ノ畫像(天竺因陀羅ノ筆ニ係ル) 一源
翁ノ珠子(水晶ニテ造ル殺生石ヲ碎キタルモノト云フ)
一祚遷法師ノ着用セシ袈裟衣及珠子 一辨才天ヨリ
授與セラレシ寶珠 一天ノ羽衣織ノ袈裟(源翁ノ着用
セシモノ) 一麻姑ノ手(源翁ノ所持セシモノ) 一玉

藻前ノ懷中鏡(直徑三寸餘)
右寺僧ノ説明スル所ニ因テ之ヲ記ス其眞偽ハ審ナラスト
雖モ或ハ數百年前ノ繪畫工業學問宗教等ヲ觀ルニ足ルモ
ノアラン
源翁和尙ノ碑ハ安穩寺中ニアリ高サ數尺明治廿二年五月
ノ建設ニ係ル

學校ヨリ安穩寺ニ至ルノ間ニ一古屋アリ現今本校習字科
ノ教師卷養澤先生ノ曾祖父ナル養湖先生ノ住居セシ家
アリ先生ノ越後ヨリ出京スル迄此地ニアリシト云フ古松青
々雅風猶存セリ

結城城趾ハ町ノ東ニ在リ結構頗ル宏壯ナリシカ如シト雖
モ今唯追手門及ヒ城壕等ヲ存スルノミ城趾ノ東ニ舊城主
水野日向守勝成ヲ祀レル社アリ今此城ノ由來ヲ聞クニ治
承ノ末結城朝光ノ此地ニ封セラレシ後常陸ノ眞壁下野ノ
芳賀ヲ兼領シ子孫連綿タリ足利尊氏反逆ノ際朝光六世ノ
孫直朝之ニ與ミ足利持氏將軍義教ト隙アリシ時直朝ノ
曾孫氏朝ハ鎌倉ニ屬シテ室町ニ敵シ持氏亡フルニ及テ其
孤ノ成氏チ城ニ奉ス敵軍來リ攻ルニ及テ支フルニ能ハス
終ニ自殺シテ成氏ヲ古河ニ逃レシメ城遂ニ陷ル成氏管領
タルニ及ヒ結城氏ヲ德トシ氏朝ノ遺胤成朝ヲシテ再ヒ結
城ノ城主タラシム天文中ニ至リ結城氏勢衰ヘ小田原ノ北
條氏ニ頼テ僅カニ保ツヲ得タリ天正十八年豊太閤小田原
征伐ノ時成朝ノ玄孫晴朝首ニ欸ヲ送り因テ封ヲ全フスル
ヲ得タリ關ケ原ノ役兩端ヲ持セシヲ以テ其疑ヲ晴サシカ
爲メ家康公ノ庶子ヲ迎ヘテ城ヲ讓レリ是ヲ結城秀康トシ
稱シケル既ニシテ秀康封ヲ越前ニ移サレ城暫ク廢ス其後
水野勝成參河蒞屋ヨリ徙封セラレ一万八千石ヲ領シ以テ
維新ノ時ニ至ル
城墟ヲ出テ東郊ノ外ニ一碑アリ墓表ニ嗚呼可惜哉忠臣
小塙兵馬之墓ト刻セリ蓋シ兵馬ハ結城戰爭ノ後其主ニ抗

セシ悔ヒ自殺シテ以テ其志ヲ明ニセシト云フ
更ニ路ヲ東方ニ進メハ寂寥タル丘陵ニ廿箇ノ墓アリ石燈籠羅列シ繞ラスニ木柵ヲ以テス結城家累世ノ墳墓ナリト此地方ハ古昔武内宿禰ノ東巡觀察セシ處ニシテ所謂日高見國トハ即チ此邊ノコナリト顧フニ當時ハ草莽荒蕪ナリシモ武内其土地ノ肥沃ナルヲ知リテ奏上シ爾來世ノ進化ト共ニ此ノ如キ良田ニ化シ鬼怒川之ヲ潤シ米穀煙草等ヲ産シ養蠶ハ殊ニ其盛大ナルヲ見ル又此地方山川ノ名稱ノ由來ヲ聞クニ蠶桑ノ古來盛ナリシヲ推知シ得ヘシ筑波トハ着葉トモ書シ桑樹ニ葉ノ附キタルヲ形容シ鬼怒川ハ絹川ト稱シ小貝川ハ養蠶川ト書シ結城ハ結布木ト書スルカ如ク其他地理上ノ故事頗ル多シ鬼怒川及小貝川ハ下野ヨリ來リ又田川アリ皆左右ニ用水ヲ分チ此等諸川ノ灌溉スル所實ニ八十八村ニ亘レリ嗚呼其利大ナル哉
結城ノ巡覽既ニ畢リ郊野ヲ行ク一里計一橋ヲ渡ル是ヲ田川トス又一ノ渡船場アリ即鬼怒川ナリ清流帶ノ如シ源ヲ下野ノ鬼怒沼ニ發ス大谷川ヲ合セ水勢奔騰此ニ至テ愈々大ニシテ廣サ百五十間ニ及ヘリ川ヲ渡テ川島ニ休フ時ニ午後二時過ナリキ是ヨリ下館ニ至ルノ間川島村附近ニ於テ發火演習ヲ舉行ス此ヲ第一ノ演習トス今其概畧ヲ記サンニ 其方法全生徒ノ四分ノ一ヲ防禦隊ニ殘シ餘四分ノ三ヲ攻撃隊トス
先ツ絹川ヲ渡リ防禦隊ヲ先發セシメ川島村ト下館トノ道路ニ沿ヒタル雜木林中ニ前哨ヲ配置ス

攻擊隊ハ川島村端ヨリ警戒法軍法ニ依テ搜兵及前兵主部ト梯形ヲ造リ凡ソ九百米突ニ至テ防守隊ノ步哨攻擊隊ノ搜兵ヲ發見ス夫ヨリ攻擊隊ハ前兵ヲ散開シ戰團隊形ヲ取り進撃シ遂ニ援兵ヲモ増加シ防禦隊ヲ林外ニ驅逐スルヲ以テ演習ヲ終ル
右戰團間援隊ヲ増加セサル前道路ニ密集セシキ防禦隊ノ伏兵一齊射撃ニ三回行ヒシモ之ニ應スルノ隊形ニ移ラサリ併シ一齊射撃モ不發ノ多キト人員僅少トノ爲メ攻擊隊ニ充分ノ注意ヲ催シ能ハサリシハ遺憾ナリシ戰團線ノ連絡ヲ保チ能ハサランカノ觀アリ尤モ注意スヘキコナリ
四時四十分下館ニ着ス結城ヨリ此ニ至ルマテ三里トス第一第二組ハ常盤屋ニ第三組ハ新巴屋ニ第四組ハ巴屋ニ宿ス下館ハ町並結城ニ比スレハ一層整理セリ街道廣豁家屋清潔戸數人口等ハ畧ホ結城ニ同シ
下館志ヲ按スルニ天正年間水谷勝俊此ニ居リ當時結城ノ附庸タリ寛永中水戸中納言頼房卿ノ庶長子松平頼重(左京大夫)此ニ封セラレ寛文中ニ至リ増山正爾代テ封ヲ受ク元祿中ニ井上大和守正岑之ニ代リ翌年又黒田氏之ニ代リ享保十七年石川近江守綱茂封ヲ受ク二万石ヲ領シ以テ維新ノ時ニ至ル
二十九日 火曜 雪 午後 晴
午前六時起床七時半常盤屋前ニ整列時ニ白雪霏々咫尺辨セス寒氣凜々骨ニ徹ス衆皆外套ヲ着シ靴ヲ負ヒ草鞋ヲ

穿チ勇チ鼓シ以テ發ス
下館ヨリ一里許養蚕村大字川釣ト云ヘル所ニ休ム時正ニ八時二十分飛雪益々甚シク天地闇々綿絮ノ如シ又一里許リ行キ大村大字松原ト云フ所ニテ休ム時ニ九時十分筑波町ハ尙三里アリト十時頃ヨリ雪漸ク雨ニ化シ大陽ノ淡影ヲ雲間ニ見ル然レモ雲霧四方ヲ塞キ筑波峯近ク目睫ニアルモ僅ニ其山麓ヲ見ルヲ得ルノミナリキ春雪漸ク解テ道路溼滑頗ル行歩ニ艱メリ十一時筑波町大字大島ト云ヘル所ノ一茶店ニ至テ中食セリ猶進ム一里此間路漸ク登リ蜿蜒岐嶇零時四十分漸ク筑波町ニ達シ一組ハ結束屋ニ二四組ハ江戸屋ニ三組ハ大越屋ニ投宿セリ
筑波町ハ山ノ南中腹ニ位シ麓ヨリ登ルコト二十余町戸數大凡三百アリ山腹ノ町ナレハ家並元ヨリ整ハス恰モ石垣ヲ崩シタルカ如シ然レモ驚クヘキモノアリ江戸屋ノ如キ結束屋ノ如キ皆西洋風ニテ大ナル材木ヲ以テ造築シ山中ニハ珍ラシキ巨構ナリ樓上ヨリ遠ク望メハ右ハ遙ニ富岳ヲ望ミ左ヨリ前面ニ蜿蜒セヘル蘆穂加波等ノ山脈ニシテ乍チ斷ニ乍チ續キ房總ノ諸山ニ連リ以テ東海ノ野ヲ分畫セリ俯シテ八州平野ノ大部ヲ瞰ヘハ利根鬼怒ノ諸川ハ僅ニ其蜿蜒出沒ノ狀ヲ認ムヘシ又南方山ヲ隔テ遙カニ一大鏡面ノ如キヲ見ル即チ霞浦ノ大湖ナリ午後一時半一同筑波神社ニ詣テ本社務所ニ至ル此地町ノ西北最高處ニアリテ房總ヲ眼下ニ瞰ミ眺望絶佳ナリ寶藏ノ古物ヲ見左ニ之レヲ擧グ

- 一三代將軍家光公寄附太刀(吉宗作長二尺三寸鞘ハ梨地)
 - 一文臺(元祿年中三代將軍家光公寄附梨子地金ノ高時繪)
 - 一堆朱食籠(明代ノ古物)
 - 一耳盞(五代將軍綱吉公ノ寄附御臺所ノ化粧用ト云フ)
 - 一湯注(耳盞ノ附屬品ニシテ葵ノ紋金ノ時繪アリ)
 - 一黃朱菓子盆(綱吉公ノ母桂昌院ノ寄附明ノ萬曆年間ノ製)
 - 一水晶球(家光公寄附徑二寸七分)
 - 一琵琶一面付撥(年代詳ナラス)
 - 一陣貝二箇(並ニ大ナリ年代詳ナラス)
 - 一軍配三柄(一ハ徳川家康公ノ所持ニ係カル革製ニシテ長サ一尺七八寸表面ニ十二支ヲ畫キ裏面ニハ星ヲ畫ク一ハ光譽上人ノ所持ニシテ關ヶ原ノ役ニ用ヒシ物ト云フ一ハ小田左衛門督成治ノ所持セシモノナリ)
 - 一趙子昂ノ畫(王摩詰竹裡館圖)
 - 一管公自畫像(林大學頭信篤將軍家ニ獻シ將軍家又之レチ此ニ寄附セシモノナリ)
 - 一林大學頭信篤ノ恩賜管神自畫肖像記(享保六年辛卯七月二十五日信篤七十八歳ト云フ)
 - 一岩佐又兵衛ノ浮世畫(百工ノ畫尤モ妙筆ナリ)
- 事務所ヨリ左折シテ石階ヲ登リ一ノ大門ヲ過テ筑波神社

ニ達ス今此社ノ由來ヲ聞クニ祭神ハ伊邪那岐伊邪那美ノ
二神ニシテ其何時ニ始マリシヲ詳ニセスト雖モ近頃筑波
町ノ東山口村ニアル石鳥居大風ノ際傍ナル大木倒レテ打
碎ケシカハ中ヨリ鐵製ノ鏡出テタリ銘ニ征夷大將軍阪上
田村麻呂獻ト彫刻シ在リト是ニ由テ之レヲ見レハ此社ノ
創建ハ千年以前ニアルヲ知ルヘシ其後空海上人本地垂跡
ノ説ヲ主張セシヨリ村上翁ノ延暦年間ニ至リテ觀音堂ヲ
安置ス家康將軍ノ時光譽上人ヲ以テ護持院ノ住職トス護
持院ノ本院ハ江戸ニアリテ役僧ヲシテ此ニ居ラシム其寺
領千五百石アリテ千石ハ家康ヨリシ五百石ハ家光ヨリ出
セリ其領地ハ今ノ筑波沼田礪氷ノ三郡ナリト家光幼少ノ
時其乳母春日局家光ノ將軍タランコト此神ニ立願セシニ
成就セシカハ喜悅ノ餘リ終ニ十一面觀音堂ヲ再建シ其美
麗ヲ極メタリ當時其工事ニ預リシモノハ當町ノ豪家ナリ
ト云フ維新ノ際神佛分離ノ爲メニ終ニ觀音堂ヲ毀テシヲ
以テ予輩ヲシテ見ル能ハサラシム然レモ神社ノ宏莊美麗
ナル日光詣社ノ風アリテ其結構モ亦之レニ副ク今社内ノ
古物ヲ左ニ掲ク

- 一曲玉一對(一連ハ赤玉三ツアリテ他ハ皆青一連ハ赤
六ツアリテ他ハ皆白)
- 一渾乳石花瓶(長二尺許直徑五寸許淡青色)
- 一大御輿小御輿
- 一陣大鼓

元治年間水戸ノ正義黨ノ首領藤田東湖ノ三男小四郎及ヒ

田丸稱右衛門等攘夷説ヲ主張シ烈公ノ遺命ヲ奉シテ常野
ノ間ヲ煽動シ三百ノ兵ヲ得テ下野ノ太平山ニ據リ好黨ヲ
朽木ニ破リ終ニ此山ニ據ル田丸氏ハ今ノ事務所ニ居リ三
ヶ月間此ニ籠リシト云フ既ニシテ幕府近傍諸藩ニ令シテ
之ヲ撃タシメシカハ好黨大ニ力ヲ得テ戰鬪常ニ絶間ナカ
リキ時ニ武田伊賀守水戸侯ノ命ヲ以テ鎮撫ニ來リシヲ奸
黨之レヲ敵視シ迎撃テケレハ伊賀守已ムヲ得テ走テ那珂
湊ニ據ル藤田等ハ之レヲ聞キ亦走テ那珂ニ投シ武田氏ニ
合ス

筑波山ハ山ノ向背ニヨリ其氣候チ異ニス南面即チ筑波町
近傍ハ頗ル温暖ニシテ蜜柑ハ殊ニ名産ナリ是レヲ以テ朝
來ノ雪モ日光ト共ニ消失セリ此山ノ口牌ニヨルニ古昔海
中ニ屹立シ南方一帶ノ平野ハ渺茫タル大海ニシテ霞カ浦
ハ特ニ海底ノ深カリシ所ナリト今ヤ化シテ數十里ノ沃野
トナル所謂滄桑ノ變ナルモノ或ハ虛傳ニアラサルナリ
山下ヲ流ルハ川ヲ筑波川ト云フ一名櫻川ト云ヒテ西茨城
ヨリ發源シ上流ニ櫻樹多キカ爲メニ櫻川ノ名アリ

此日ハ午後七時マテ散步七時半人員檢査アリテ就寢
三十日 水曜 晴天

五時起床六時發足東町ヲ過キテ女休山ノ道ニ登ル山路險
阻大小ノ岩石磊々タリ衆皆苦ヲ呼ハサルハナカリキ登ル
一廿余町路傍一屋アリ餅ヲ賣ル辨慶ノ力餅ト稱ス宿雪ハ
猶ホ解ケヤラス登ニ從ヒテ益々積聚セリ辨慶七辰ト稱ス
ル所ヲ過キ入船出船ノ大岩ニ登ル階子ニ鉄鎖二條ヲ以テ

シ攀チ登ル眺望絶佳ナリ小社アリテ側ニ左ノ歌ヲ題セリ
出船あるや入船あるや岩形なるみ筑波と人はいふらん
茲ニ至リ霞浦ト太平洋ノ間ノ陸地ニ横ハレル北浦ヲ發見
セリ又太平洋波瀾ノ跳ルヲモ認メタリ眺望千里渺渺涯チ
知ラス加之眼下ノ樹木皆白雪ヲ戴キ風色畫ノ如ク頗ル身
ノ疲勞ヲ忘レタルノ感アリ下リテ胎内潛ヲ過ク道路崎嶇
殆ント攀チ難キモノ數丁雷神窟ニ至リ又鉄鎖ニ助ケラレ
テ登ル仰テ見レハ大水柱ノ長サ數尺ナルモノ數條アリ是
間多賀神社ノ傍ニ開運石アリ市杵島神社ノ傍ニ寶珠石
アリ熱田神社ノ傍ニ子種石アリ少シク降りテ巨岩大黒天
ノ形ヲナセルアリ高サ數丈大黒石ト稱ス既ニシテ非常ニ
急峻ナル處アリ二條ノ鉄鎖長一丈許ナルヲ攀チ漸ク頂上
ニ達セリ筑波女休神社アリ一拜シ終リ陸軍測量部ノ建設
セル三角点ニ至リ四方ヲ睥睨ス或ハ發砲シテ以テ距離ヲ
試ムルモノアリ或ハ双眼鏡ヲ以テ望見スルアリ或ハ「パ
ラメーター」ヲ以テ高低ヲ檢スルアリ時ニ先鋒第四組ハ
既ニ男休山頂ニ達シ亦發砲シテ相應シ響キ山谷ニ盈ツ女
休ヨリ男休ニ至ル間殆ント十數町途甚タ險ナラス此間二
亭アリ一ハ名産ノ筑波根ニテ羽根ニ菓子ヲ副ヘテ賣ル古
キ櫻樹ノ板ニ小野小町ノ歌ナリト書セシモノナリ

櫻木いまたいよーへをわすらはて板になりても花やさ
くらん

亭翁曰ク昔シ小町此山ヲ過キシ時斯クハ口スサメリト其
眞偽如何ニヤ一ハ所謂夫婦餅ヲ賣ル依雲亭ト云フ藤田小

四郎眞蹟ノ額アリ長一尺四寸許巾八寸許ノ櫻板ニ行書ニ
テ依雲亭ト刻メリ二亭ノ間ニ大鐵アリ長サ一丈許ナリ
キ

夫レヨリ進テ鉄鎖ヲ攀ル一兩回男休山頂ニ至ル男休神社
ハ女休ヨリ一層宏大ニシテ社掌ノ如キ人アルヲ見ル傍ニ
一亭アリ又力餅ヲ賣ル此處ニテ種々ノ實驗ヲナシ四方ヲ
回顧シテ地理ヲ觀察セリ女休山ノ高サハ三百四十丈許ナ
リシカ男休山ハ三百十八丈許ニシテ差引二十二丈許ノ差
アリ

路チ北方ニ取リテ山ヲ降ル積雪路チ沒ス衆轉セントスル
モノ數度ニ及ヘリ中腹ニ至レハ雪漸ク解ケ泥濘殊ニ甚シ
ク身ヲ粘土ノ上ニ横ヘシモノモ少ナカラザリキ
眞壁ニ至リ橋本屋ニテ晝食ス筑波町ヨリ頂上迄一里半下
リ一里麓ヨリ眞壁迄一里半ト云フ眞壁ヨリ岩瀬迄三里ノ
間ヲ歩ス行々筑波ノ山ヲ顧ミ又蘆穂加波ノ諸山ヲ見ルニ
蘆穂山頂ハ尙雪ヲ載キ加波山以下ノ諸嶺ハ既ニ溶解セリ
加波山腹ニハ所々花崗石ヲ出ス所アリ此山ノ名産ニシテ
販路モ亦甚廣シ山麓ヨリ岩瀬ニ至ル迄小鉄道ヲ延テ以テ
石ノ運搬ニ供セリ其産額ノ盛大ナルヲ知ルヘシ

岩瀬ニ至リ戌亥屋ニ休憩ス空閑行ノ第三列車ハ車室狹ク
シテ唯二十四名ヲ乗スルノミ他ハ六時ノ第四列車ヲ待ツ
此間隨意散步ヲナセリ

投宿セリ時ニ八時折惡シク茨城有志者懇親會ノ爲メ二百
余名會集セシヲ以テ頗ル混雜ナリキ
本日ハ非常ノ疲勞ナラントテ校長ヨリ酒ヲ給フ十時半人
員檢査畢テ就寢
(以下次號)

廣 告

●埼玉私立教育會々員諸君ニ告ク

●去月中入會者姓名左の如し 北足立郡浦和町喜多見佐
喜君 北埼玉郡廻道川村吉野重明君 南埼玉郡岡泉村青
我學校齋藤友吉君 秩父郡名栗村第一尋常小學校長谷川
庫松君 東京日本橋區十軒店六番地阪上七君 入間郡
入西村入西小學校關仁之吉君 賀美郡丹莊村大字八日市
三十九番地阪庭清一郎君 合計九名
●去月中退會者姓名左の如し 平田祝次郎君
入退會者差引八名の増現在會員八百十三名あり
●會員轉居者左の如し 東京市小石川區久堅町七十四番
地田中彌壽生君 北埼玉郡埼玉村大字野六十番地金子八
十五郎君 北葛飾郡早稲田村大字駒形深井覺之丞君
●去月中寄付品及姓名左の如し
一教員恩給法令註解附關係諸規則全一冊
落合茂三郎君
一明治廿五年尋常師範學校諸規則說明書全一冊
文部省普通學務局

●去月十六日常議員會を開く出席員及決議の事項左の如
し

町田則文君	堀江敬慎君	須永和三郎君
木原守三郎君	湯淺爲太郎君	今村喜代助君
田口宰吉君	中島義三郎君	石井了一君
須藤周二郎君	齋藤竹次君	狩野德二郎君
一條龜二郎君	川路重明君	澁谷岩太郎君

一習字帖編纂の意見寄稿者へ謝狀を呈する事
一習字帖編纂の意見寄稿中左の諸氏の考按三篇を優等と
認め謝狀を呈し毎篇金三圓の報酬を贈る事
(松本近三郎君 長坂乙治君 片山福三郎君
石井福太郎君)
一習字帖編纂の要領書を(委員の調査せしもの)可決す
一習字書出版に關する方法の調査委員を左の三君に委託
す
須藤周二郎君 堀江敬慎君 今村喜代助君
一同上委員の調査事項は常議員會の決議を経て確定する
事

埼玉私立教育會

禁酒

小生義時事ニ感アリ自今禁酒ス茲ニ辱知諸君
ニ謹告ス
高麗郡飯能學校

松本辰之助

明治廿五年八月五日刊行

發行所

埼玉縣北足立郡浦和町百六拾番地
埼玉私立教育會事務所

發行人兼編輯人 廣瀬道知

印刷人 沼野武憲

廣告

本誌定價金拾錢
但郵稅ヲ要セス

明治廿五年六月廿一日遞信省認可